-195-　肝シンチグラムによる限局性肝疾患の診断

弘前大　第一内科
○坂田　優，　石沢　誠，　小松良彦
公立米内沢総合病院
富田重照

昭和４６年３月より昭和５０年１２月までに５９６症例に肝シンチグラムを施行し，このうちspace occupying lesion(SOL)は１５０例にみられ，手術や剖検などで１１８例に確定診断を得た。その内訳は原発性肝癌が２９例，転移性肝癌７６例，その他１３例であった。これらについて質的診断を試みたので，その成績を報告する。

原発性肝癌と転移性肝癌におけるＳＯＬの部位と脾影出現度について比較検討した。原発性肝癌では単発性であることが多く，両葉にまたがるものを加えると４９％となり，中等度以上の脾影を示すものが多かった。転移性肝癌では多発性，または両葉にまたがるものが７７％を占め，脾影は１例をのぞき軽度出現を示した。以上からＳＯＬが単発性で両葉にまたがるもの，また多発性でも脾影が中等度以上みられるものは原発性肝癌を疑うべきであることが示唆された。

さらに両者の鑑別のため^{67}Ga-citrateによる肝ジンチグラムを施行し，原発性肝癌で陽性像を得ることが多かった。

^{99m}Tc-pertechnetateおよび^{67}Ga-citrateによる肝シンチグラムに加えて，最近^{75}Se-selenomethionineによるシンチグラム，さらにα-fetoproteinの定量などにより，ＳＯＬの質的診断へのアプローチを試みたので若干の症例を示し，その概要を報告ずる。

-196-　び慢性肝疾患の肝シンチグラフィー

大阪府立成人病センター、ＲＩ科*、内科**
○長谷川義尚*、中野俊一*、児島淳之介**
清永伍市**
阪大微研内科
石上重行

び慢性肝疾患の肝シンチグラムと組織学的所見との対比を行い興味ある結果が得られたので報告する。

研究対象。生検により確診し得たび慢性肝疾患68例で内訳は肝硬変36例、慢性肝炎20例、脂肪肝6例及びdrug induced lipidosis 6例である。このうち肝硬変はGallに準拠して、postnecrotic（11例）、posthepatitic（活動型17例、非活動型5例）及びnutritional（3例）cirrhosisに分類した。

検査方法。^{198}Au-コロイド静注后、Armcounterにより血中コロイドのクリアランス（T½）を測定し、約2時間后、島津製シンチスキャナー（クリスタル3φ×2吋、10Fハニーコーンコリメーター）もしくは東芝製シンチカメラ（GCA 202）を用いて肝シンチグラフィーを行った。

研究成績。血中コロイドクリアランス（T½）はpostnecrotic cirrhosis（PLC）13.3分（平均値、以下同様）、posthepatitic cirrhosis（inactive）（PHLCi）9.0分、posthepatitic cirrhosis（active）（PHLCa）8.8分、慢性肝炎（活動型）（CHa）7.3分、慢性肝炎（非活動型）（CHi）6.2分及びdrug induced lipidosis（DIL）8.0分で殊にPLCでは著明に延長している例が多くみられた。次に、久田の方法により左巾及び右巾を計測し、左/右比を求めた。左/右比はPLC 0.63、PHLCi 0.72、PHLCa 0.8、CHa 0.63、CHi 0.59、nutritional cirrhosis（NLC）0.56及びfatty liver（FL）0.63であった。PLCと比べてPHLCaでは左葉腫大例の多い傾向を認めた。次に、脾影はPLC 11例中9例（82％）、PHLCi 5例中4例、PHLCa 17例中10例（59％）、CH 20例中6例（30％）、DIL 6例全例、NLC 3例全例及びFL 6例中3例にみられ、殊にPLC及びDILに高率であった。

総括。肝硬変を中心に種々の型の肝疾患の^{198}Au-コロイドシンチグラフィーを行い病型によってT½、肝左葉腫大の程度並びに脾影の出現率に差のあることを示す成績を得たが今后さらに症例を重ね結論を出したい。

Presented by Medical*Online